

地適応を生態学の面から明らかにする上で有効だと考えている。

論 文

好広真一, 1974. 上信越のニホンザル(1)。モンキー, 139・140: 40-45

好広真一, 1975. 上信越のニホンザル(2)。モンキー, 141: 26-31

学 会 講 演

好広真一・常田英士, 1976. 志賀高原横湯川流域のニホンザルの個体数変動, 第23回日本生態学会

屋久島におけるニホンザルの地域個体群の生態学的研究

Q 増井 憲一 (京大・理)
好広 真一 (同 上)
桜井 道夫 (同 上)
福田 史夫 (マカク研究会)
東 滋 (京大・霊長研)
足沢 貞成 (同 上)

(1) ニホンザルの生活を環境との関係において把握することを目的として, 屋久島西部(研究林予定地)に生息するニホンザル自然群を対象に,

- 遊動, 群れサイズ, 行動の夏季と冬季の比較
- 島内でも冬期には降雪をみる地帯にすむ群れの垂直分布の調査
- 遊動中など自然状態におけるニホンザルの行動, 音声などの観察・記録
- 生息環境の調査

をおこなった。

- (2) a. 西部村道集中調査と登山道センサス。
b. 多方面の資料収集。
c. 国割岳西斜面に観察ルート設置。

調査の経過: 50年7月16日上屋久町永田着。17日, 西部林道半山に Camp 設営, 8月9日まで Base Camp とし, 海岸ぞいに永田から瀬切川までの約 10 km の区間にて, 群れの分布, サイズ, 遊動, 食性などの調査を集中的におこなった。調査には, グループメンバーの5名と対応者の東のほか, 多くの人々が参加し, 延14名となった。8月10日から14日までは, 1パーティーは, 安房から屋久杉ランドの餌付群観察へ向い, 1パーティーは, カンカケ岳より国割岳に向って, 垂直分布調査に出発したが, ヒル, 蚊, 雷雨のため, 国割岳直下より引き返さざるをえなかった。

結果: 屋久島西部林道には, 6~7群が隣接して生息している。このうち, 5群について, 頭数と構成が調べら

れた。サイズは, 15~50頭であった。調査期間中, サルたちは, アコウの実にその食物を強く依存しており, 遊動範囲は, 極めて小さかった。

資料はまだ整理中であるが, 昨年(1975)の調査分とあわせて, 全ての記録をまとめて雑誌「にほんざる」に発表の予定である。今回の調査によって, 西部林道における群れの分布はほぼ確実に把握しえたと考えられ, 今後は, 季節的变化とサル(ニホンザル)の生活との関係など, 1つ1つのテーマごとに集中的調査をすすめてゆくことが可能になったと言えよう。

房総丘陵・高宕山地区・石射太郎餌場に出席するニホンザルの社会学的・生態学的研究

○

上原 重男 (京大・理)
岩野 泰三 (東大・理)
福田喜八郎 (東大・農)

高宕山地区石射太郎餌場のニホンザルT-I群は, 天然記念物であるにもかかわらず不法な攻撃にさらされてきたため, 従来から個体群の動態や個体間関係に注目して調査研究をおこなってきたが(研究成果1, 2参照), ここでは最近とりまとめたニホンザルのフンの形態的変異について報告する。

従来フンの調査は房総丘陵の全域を対象にしてきたが, 一般の野外で採集されるフンは排泄後の時間経過がまちまちで厳密な比較研究が難しく, また形態変化が著しい場合他の動物との識別が困難となりがちである。

この点石射太郎餌場の餌付け群は野生味を比較的良好に保存する理想的な研究対象であるため, 1975年度を通じてこの群れを主たる対象にフンの形態を調べた。

ニホンザルのフンの形態にはかなりのバラツキがみられ, 特に冬期の三角むすび形のフンはよく知られている。このようなバラツキを, フン構成物質の原形保持能力と消化管内のフン塊形成作用の2因子から生成論的に一貫性のある類形区分を試み, 8類形を認め, 各類形別頻度分布の周年的変化を調べた。

フンの形態的変異は各月ともかなり著しいが, 頻度分布のモードの位置にはすでに知られた食性の周年的変化と対応する季節的な特徴がみられる。すなわち, 生理的に活性化した冬芽ないし枝先食いの2・3・4月に典型的な三角むすび形のフンが多く, 若草食いの目立つ5・6月に軟便でやや大型の平滑円筒形のフン(しばしば鮮緑色ないし鮮黄色)が多い。他の時期には中間的な位置にモードが現われる。

研 究 成 果

1. 長谷川寿一・平岩真理子, 1976. 高宕山第I群調査報告(2) グルーミング行動からみた社会関係。第20回プリマーテス研究会。